

「バカなのは俺の方じゃね…？」

高橋 勇

(英米文学専攻教授、近現代イギリス文学)

今は昔。小難しいことを小難しくいう癖のある男がおりました。暇な時間も多かった時代、この男は難しいものからくだらないものまで多くの書物を読みまくり、ああでもないこうでもないと考えながら、時おり友だちとそうした考えについて話し合ったりしていたそうです。ちなみに定職にはついておりませんでした。

あるとき彼は、とある熱狂的宗教家の書物を読みました。その本には著者の見た夢のようなお話や超常的な経験が事細かに記されています。ですが読んだ男は、「言いたいことは分かるが意味ねえな」という感想を持ちます。

理由は簡単、男は著者がどういった（間違った）前提に基づいて考えているかを理解でき、書かれている不思議な事柄にも合理的な説明を思いつけたのです。しかも著者がわざと読者をだまそうとしているとは到底思えない…。ということは、著者は本気で「そんなこと」を主張しているわけです。一生懸命旅路をゆく人が、それにもかかわらずどこかに迷い込んでしまうところを目の当たりにしたようなもの。ここでこの小難しいことを考える男は断言します。「この著者は無知だ」と。身も蓋もない。

しかしこの男、彼にとってもわけの分からないことを書きまくっている別の著者の作品を長年かけて読んでいました。プラトンとかいう昔の人の著作です。「こいつすげえなあ」と感じつつも、あちこちで矛盾した言い回しや分かりにくい論理があるため、思想の理解には一向に至りません。作品によってはとっても分かりやすいのに、全体として考えてみると実はよく分からないことを言っている著者なのです。

「はいはい、中二病なのね。難しく言いたいお年頃なのね」といえば済んでしまうのかもしれませんが。しかしこのひねくれた男は納得できません。「なんでこいつの言うことが分からないのか」の理由自体が自分で納得できないからです。これだけ「すげえ」と思える著者の言っていることが「無意味だ」と断ずることは、この男には到底できませんでした。ここで彼はがっくりと結論します。「分からないのは自分の能力・知識がまだまだ足りていないからだ」と。

こうしてこのひねくれ男は一つの「格言」をひねり出しました。「書いている人間の無知を確信するまでは、その著者よりも自分の方が無知だと思っておけ (until you understand a writer's ignorance, presume yourself ignorant of his understanding)」。

まあ読んでいるうちに気づいたでしょうが、これは過去の実在の人物のお話です。もちろん私——ではなく18世紀末から19世紀にかけて活動したロマン派詩人サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) が自分の「文学的自叙伝」で披露している見解で、いろいろなところで引用されていますから、どこかで似たような言い回しを目にしたことがあるかもしれません。

長々とパラフレイズした理由は、実はたいへん簡単です。この「格言」は、大学で何かを学ぶ時の指針——少なくともその一つ——とすべきだと思うからです。私たちは生活をしていく中で、面白いもの／面白くないもの、高尚なもの／低俗なもの、すごそうなもの／ダメそうなもの、などなど、自分の嗜好にあたり合わなかったりす

る様々なものに出会います。それを好き／嫌いで仕分けすること自体は全く問題ないでしょう。

しかしこれを「評価」するにあたっては、特に上下／優劣をつけることになったならば、自分がそれを完全に理解しているかみずから問いかける必要があります。あ、「完全に」というのはもちろん言葉の綾で、人間である以上そんなことは望むべくもありませんが、そうするだけの努力と自省を心がける、ということであり、大学教育などで求められる「批判的思考」といったものはつまりこうしたことではないかと思うのです。引きこもって、いろいろな情報をネットに頼るようになったいま、多様な「知識」とそれに関する「意見」が世の中に氾濫していることを、皆さんは以前より意識するようになったでしょう。そのさなか、「知識」を吟味し、自分の「意見」が表明するに足りるものか（あるいは表明されている他者の意見が検討に値するか）を考えないと、いたずらに不安のメールシュトルム（大渦）に吞まれてしまうことは明らかですよね。

私自身がこの「思考」をいつでもできているかといえば、もちろん自信をもって「できてません」と答えます。が、酒の席での放言や家庭での愚痴でもなければ、自分がどういう根拠で「評価」しているかを意識するべきでしょうし、そしてそのための基礎を作るのが、大学における「学び」だろうと思います。私が慶應義塾大学文学部で英文学を学ぶことにした理由は大変単純かつ複雑で、とてもここでご披露できるようなものではありません。ただ、「オタク」という言葉もなかった時代から、(かつては)さげすまれていたジャンルである漫画やアニメやファンタジーなどなどに耽溺してきた身として、自分の好きなものをどのように考え人に説明するかは、人生を通じての課題でした。これが私の「研究」の原点であるとだけは断言できるような気がしなくもありません。

ちなみにコールリッジのこの姿勢は、一つ下の世代の天才詩人ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) からは、「彼は半分だけの理解で満足することができず、結果として美というものを感じ取れていない」と酷評されました。お、おう…。自戒の念も込めて。 (2020/5/22)